

人類生態班 C

社会開発と感染症：ラオスのデング熱／デング出血熱の事例から

川端真人（神戸大学医学部）

キーワード：デング熱、ネッタイシマカ、ウイルス伝播、都市化

調査期間・場所：ナシ

Social development and infectious disease: Case study on the expansion of Dengue and Dengue hemorrhagic fever transmission in the Lao P.D.R.Key words: dengue fever, *Aedes aegypti*, virus transmission, urbanization

突然の高熱で始まるデングウイルス感染には軽症の熱性疾患であるデング熱と出血傾向や低循環血漿量性ショックを併発し生命に危険なデング出血熱の2つの病態があり、いずれもヤブカ属のネッタイシマカなどによって媒介される。ネッタイシマカはアフリカ原産で、薄暗い森林を生息域とする原種が進化と適応を繰り返し、明るい開けたヒト生活圏の近辺を生息域とする。ヒトの生活に密着するネッタイシマカは、17-18世紀の大航海時代には帆船に便乗して世界の港町に分散したと考えられている。一方のデングウイルスの原産は東南アジアとされ、マレーシアのジャングルでサルと森林性の蚊の間でウイルスが伝播されていた。ネッタイシマカ同様にヒトの移動に伴ってデングウイルスは東南アジアから世界に分散し、18世紀後半には世界各地でデング熱の発生が報告されるようになった。

ウイルスと宿主（ヒト）と媒介蚊の3者が関与するデング熱は都市化が進み、人口が集中すると大発生を繰り返し、やがてはデング出血熱へと移行する。そのためデングウイルスの伝播と病態は都市での人口集中や海外との交流の盛隆を反映する。最近では、デング熱ウイルスの媒介能があり、ネッタイシマカ生息域の周辺、つまり都市周辺を生息域とするヒトスジシマカの動向が注目される。ヒトスジシマカはアジア原産で背中にある縞模様から「アジアのトラ」と恐れられる種で、1980年代にはアメリカ大陸の広域に土着し、アフリカ大陸にも進出している。ヒトスジシマカの拡散はデング熱ウイルス伝播を多様化し、対策を混乱させる。

ラオス国のデング熱／デング出血熱に関する情報は限られており、報告はデングウイルス抗体の検出など血清学的な確認のない臨床経過からの診断によるものが大半である。これまでの報告ではマラリアに次いで病気負担の大きな昆虫媒介感染症で、周期的な流行を繰り返しているが、ラオスでの流行域の限定や歴史的な経緯など詳細は不明である。主要媒介蚊はネッタイシマカとされが、ヒトスジシマカに関する情報は少ない。1975年の独立とその後の防衛政策、1992年以降の経済開放政策とアジアの経済危機などさまざまな局面をラオスの社会経済は経験して発展した。デング熱ウイルスのラオスへの侵入時期に関する報告はないが、経済開発や海外との交流、ことにタイとのヒトや物品の流動に連動して内陸国ラオスにデング熱は流行していると推測される。報告や記録など既存の情報収集に加え、主要都市およびその周辺でのネッタイシマカやヒトスジシマカの分布状況、媒介蚊のウイルス感染と種類を調査して、内陸国ラオスにおける社会経済開発とデング熱ウイルス伝播の関連を解析する。

<文献>

川端真人 2000 「海洋交通と都市化に関連したデング／デング出血熱の伝播動態」『地域研究論集』3:119-136

Pinheiro, FP and Corber, SJ 1997 Global situation of dengue and dengue haemorrhagic fever, and its emergence in the Americas. World Health Stat Q 50:161-169